

つては一尾も網に上せなかつた。

『去年Yがやつて来た時には、鯛ばかり喰はされたさ聞いたつげが……』

O氏はこんな事を話し合ながら、馬鈴薯の煮たのばかり頬張つた。言ふ迄もなく馬鈴薯は畑に出来るものなのだ。

O氏は馬鈴薯で一杯になつて腹を抱へて、

『だが、山葵を何うしたもんだらうて。』

さ、皆の顔を見た。するさ、一行の誰か先年農科大学の1博士が歐洲へ行く時、アルプス登山は草鞋に限るさいつて、五十足ばかり用意して往つたが、草鞋は一向役に立たず、色々持て餘した末、諸方の博物館へ日本の履ださいつて一足づゝ寄贈した事を話した。そしてO氏の山葵もこの儘宿屋に寄附したらよからうさ附足した。

お蔭で天津の宿屋の裏畑には、近頃山葵が芽を出しかけてゐる。結構な事だが、房州のやうな畫家の天國には、少し辛過ぎるかも知れない。

米國にバアナムさいふ宣教師がある、土耳其へ渡つて聖書の出版をしてゐるが、出版の合間々々には、お説教をして天國を説く事を仕事にしてゐる。だが、困つた事には身體が牛のやうに肥えてゐるので、お説教が興奮むさ、韃のやうな苦しさを息遣ひをする。

ある時友達の一人が訊いた事があつた。

『そんなにお説教ばかりしてゐるさ、天國では屹度持てるだらうな。』

『さあ、それぢやて。』バアナムは牛のやうな悲しさを眼つきをして自分の身體を見まはした。

『僕も天國へは上りたいんだが、この圖體ぢや連も上りきれまいと思つてね。』

今早稻田の圖書館にゐる湯淺吉郎氏が、聖書學者として、また同志社に關係してゐた頃、友達の中に頻りに耶穌教を説いて廻つた事があつた。

『耶穌教もいゝさ、まあ早く言つたら生命保険に入つたやうなものだね。』湯淺氏は猫のやうな圓い掌で頰を撫でまはした。『死んでみて、もしか天國があつたら、信者のお蔭で昇天を許さ』

れるし、よしんば無かつたところで、損は往かないんだからな。」

湯淺氏はこんな風に耶穌教を吹聴したものだ。

ある時、同じ口調で箏曲家の鈴木鼓村氏に傳道をした事があつた。鼓村氏は年中貧乏で、ミシンの町へ住むでも、家主に苦い顔を見せられ通しだつたので、天國が噂通り結構なところなら、今の内に一つ立派な家を豫約して置きたかつた。

「湯淺君、天國にもやつぱり家主といつたものがあるのかい。」

「そんな者はない。」湯淺氏は天國の支配人のやうな確りした調子で言つた。「つまり、早いもの勝ちなんだね。」

鼓村氏は湯淺氏のいふ天國とは、猿芝居の掛小屋のやうなものだと思つた。で、今度は内證事のやうに聲を低めて訊いた。

「天國には天妖羅があるかい。」

「なに天妖羅だつて。」湯淺氏は變な顔をした。

「麵麴に葡萄酒なら確にあるが、天妖羅は無いかも知れんな。」

鼓村氏はがっかりしたやうに言つた。

「然うか、天妖羅が無いんぢや、僕は天國は厭だ。まあ止しにくせう。」

鼓村氏は狐のやうに天妖羅さへあつたら、動物園の檻のなかにでも棲む事が出来る男なのだ。

### 細君選擇法

日本郵船會社にKといふ老船長があつた。今は船から出て、神戸の町外れさかに住んでゐるさうだが、日本人で一萬噸以上の船に乗つたのは、このK氏が最初だといふ事だ。

初めて一萬噸の船に乗つたといふだけなら、別に何の事もないが、その外にK氏は素敵な發明を一つしてゐる。それは海員の細君選擇法で、この方法で選り分けをするに、減多に間違ひはない。

「現に自分の部下だつた男で、幾人かこの方法で細君を定めたのがあるが、今ではみんなお蔭で善い女房を持つ事が出来たと言つて、禮を言ひ言ひしてますよ。」

こゝ、K氏は、その方法が有り觸れた見合ひなき、比ひでない事を自慢してゐる。

一體海員は一月の半分以上を船に乗つてゐる、なかには三月、四月も家庭には歸つて來ないものもあるから、従つて海員の女房といふものは、人並み以上に慎み深い、貞操の堅いものでなければならぬ。男といふものは、自分の女房が酸漿のやうに一室に閉ぢ籠つて、固くなつてゐるのになければ、外で酒一つ飲む事の出來ない程の意氣地なしである。海員とは言ふ迄もなく、到る所の船着きて酒を飲む事の出來る職業者である。

K氏の細君選擇方法は、これと思ふ女があつたら、座敷で見合なきしないで、その女が外出をする時、そつち後をつけて往くのだ。そして女が兩側の店を覗き覗き、きよろ／＼してゐるやうだつたら、その女は屹度移り氣だから、逆も不在勝な海員の女房には出來かねる。そんな折には早く絶念をつけて、物の半町を後を蹤けないうちに、横町へ逸れるなり、理髮床へ飛び込むなりするが可い。この位の不満足なら、髻を剃るか、頭髪を刈るかすれば直ぐ忘れる事が出來るものだ。

もしまた、女が側目も振らないで、眞直に歩いてゐるやうだつたら、それこそ飛んだ掘り出し物だから、すぐ其の足で結婚を申込む位に機敏く立ち廻らなければならぬ。大きい聲では言へ

ないが、餘り延々にしておくに、然ういふ女でも、いつの間にか側目を振る事を覺えるものだからといふのだ。

實際立派な方法だが、唯一つ言ひ添へておきたいのは、道の通り合せに、眞直に見て歩く女があつたからといつて、何處の誰ぞも知らない間は、餘り取逆上てはならない。さういふ折には一度急ぎ足に女を追越して、徐かに後を振かへつてみるがいい。眞直に見て歩く女には、斜視と鼻の低いのがあるものだ。

痘面の笑顔

今は孝行者が多い世の中だから、孝經など讀まなくなつたが、往時は何ぞいふつては、此の經書を繙いたものだ。ある時備前少將光政が、池田出羽、池田伊賀なごいふ家老達と一緒になつて、この孝經を讀んだ事があつた。

争臣の章まで來るに、光政は眼をあけて、皆の顔を見比べた。

「さ、こゝちやて、お前達にこつて忘れてはならないのは。もしか乃公に善からぬ事があつたら

遠慮なく諫めて呉れ。そしてお前達も人の諫めに會つたら、屹度その言葉を請け容れるやうにしなければならぬぞ。』  
 皆は一度に頭を下けて恐れ入つた。——頭さういふものは重寶なもので、ごんな間違をしてゐても、丁寧にお辭儀をさへするに、大抵の人は  
 『乃公の云ふ事がよく頭に入つた見えて。』  
 直ぐ感心をして呉れる。この場合頭が少し位禿けて居よう、尖つて居よう、何の差支もない。そしてそれから五分間経たないうちに、今の事情をすっかり忘れてしまふのも矢張りこの頭である。

一度に下げた頭のなかに、唯一つ下げやうの足りない頭があつた。その持主は中川權左衛門といふ男だつた。權左衛門は一膝前へ乗り出して來た。

『寔に結構なお言葉で、お家萬歳の兆に有難く存する次第でございますが……』一寸眼をあげて殿様の顔を見た『正直に申しあげますに、殿様のお顔は痘瘡の痕が見苦しく目立つていらつしやる上に、お眼の中が鋭いので、御機嫌の悪い時は、二目三拜まれないやうに存じます。で

眞實に諫言をお好みになりまするなら、何よりも先きにお顔を和やかに遊ばされますやうに……』  
 備前少將は夫を聞くに、夏蜜柑のやうな痘面を少し赤くしてゐるが、暫くするに  
 『成程な、よく言つて呉れた。』  
 言つて軽く頷いた。それからいふもの、少將は家來の前では、痘面を捻ぢ曲げるやうにしてにこ／＼した。——殿様にしては感心な心掛けであつた。

音 樂 通

音樂は最高の藝術であるが、その音樂の批評家になるには、二つの資格が要る。一つには音樂が解つてはならない事、二つには解らない癖にお喋舌がしたい事、此二つをさへ兼ねる事が出来たなら、立派な音樂批評家になれる。

音樂の面白さは馬でも感じる事ができるが、音樂の上手下手は人間にも解らぬ人が多い。トドハンターアミいへば、名高い教學者で、加之に語學の達人で、希臘、羅句はいふに及ばず、英佛獨伊露の現代語からへブリウ、アラビヤ、ベルシヤ、梵語の東洋語にも通じてゐた男だ。

「ところが、この語學と數學の達人が、音楽に來ては何一つ解らなかつたから可笑しい。師匠のド・モルガンは自分が風琴家であつただけ、トドハンターが音楽に聾なのをよく調弄つたものがある日、ド・モルガンが音楽の事で、何か冗談をいふと、弟子は頭を掻き／＼言ひわけをした。『でも、先生、私たつて "God save the Queen……" 位はわかりますよ。』

『ほう、わかるか、夫ならまんざらでもないな。』

正直な師匠は風琴のやうに鼻を鳴らして感心をした。弟子は希臘語にヘブリウ語に、別々の抽斗に藏ひ込んである頭を反らして、ぐつ／＼氣取つてみせた。

『でも、これは國歌ですからね。』

「God save the Queen」を國歌だといふのに少しも間違つた事は無い。だがトドハンターは、全くの所その音律などは少しも判らなかつた。唯何か音楽が始まるに、聴衆が一度に帽を脱いで起立をするから、そんな折に、やつと

『はゝあ、これは國歌なんだな。』

「自分も慌て、尻を持ちあげてゐたのに過ぎなかつた。

怖 い 物

「こんな人にも好き嫌ひといふものはあるものだ。むかし有馬兵庫頭といふ人があつた。その人は一代のうちに色々な仕事もしたらしいが、その仕事よりも蟹を恐がつたといふ事で今だに名を残してゐる。野道で偶々赤い爪を揮り上げた蟹に出會ふと、兵庫頭はぶる／＼顛へて、いきなり馬を引き返して逃げ出したものださうだ。もしか身持の悪い蟹が、金を貸せでも言ひ出さうものなら、兵庫頭は馬の鞍から知行も何も振り捨て、駆け出したかも知れない。

大久保伊勢守といふのは、ひきく蜘蛛を怖れた。邸の植込を徜徉してゐる時、青白い施子の花蔭に、女郎蜘蛛が居睡りをしてゐるのを見つけてもするこ、眞つ青になつて、拔脚して逃げ出したものだ。

蛙は愛嬌者で、臍の無い癖に、人間並に一つは持合せてゐるらしい顔つきをしてゐるが、廣い世間にはこんな愛嬌者を何よりも恐がる人さへある。

それは栗原主殿頭といつた男で、この男は女房をも一人持つてゐたが、その女房よりも、地震

よりも、蛙の方が怖ろしかった。ある時伴の奴を一人連れて野路を歩いてゐるに、唐突に蝦蟇に出會した。蝦蟇は先刻まで、物蔭で大學教授のやうに哲學を考へてゐたらしいが、滅法腹が空いたので、のっそり明るみへ這ひ出して來たところだつた。

主殿頭はそれを見るに、一度に二間ほご後に飛び退つた。そして刀に手をかけて屹こなつた。刀は備前の正眞物だつたが、刀鍛冶は蝦蟇を斬るために態々拵へたわけでもなかつた。

「憎つくき蝦蟇めが、己れはまだ主殿頭を知らないぞ見えるな。」

と思ひきり大きな聲で怒鳴りつけた。實際蝦蟇はまだ主殿頭を知らなかつた。で、目をあけて念入りに相手の顔を見たが、別に秀れて高い鼻も持つてゐなかつた。

「己れ、早く退り居らんか。」

主殿頭は顔ひ顔ひ刀をひっこ抜いてみせた。

だが、蝦蟇の方では別に退る程の必要もなかつたので、二足、三足のそく前へ這ひ出して來た。主殿頭はそれを見るに、

「いや、膽の太い奴めが、其方には怖いといふ事が判らんぞ見えるな。」

と、その儘刀を擔げて一散に逃げ出したさうだ。

## 惡物食ひ

「犬を食つた。」

と言ふに、感心な愛國婦人會の會員達は、

『可哀さうに生活が難かしいんだわ。』

と、直ぐ有り合せの麵麩屑を、讀みなしの雑誌を贈つて寄さうとするかも知れないが、犬を食つたのは、何も肉が高くなつたからではない。

それは犬の肉が大層好きだつたからで、この惡物喰ひは、徳川の末頃江戸に住んでゐた男だつたが、一日犬を食はなければ気分が悪くなるので、そんな折には、豫て剝いで置いた犬の皮を少しづつ煮て食べてゐたさうだ。

それと同じ頃に、江戸に大久保八右衛門といふ士が住んでゐた。この男の下郎にひきく煙草

の脂が好きなのがあつて、閑さへあるこ、色々な人から煙管の脂を貰ひ集めて、それを椀に盛つて覆盆子でも味はふやうに食べてゐた。

それによくと肯てゐるのは、松平大進といふ武士のやり方で、酒宴になるこ、極つて長羅字ですばり／＼煙草をふかし出す。そして煙草が半分ばかり燃つた頃を見計らつて、盃のなかにその吸殻を叩き込んで、ぐつ／＼一息に燻飲りつけるのだ。

灰屋紹益が愛人吉野太夫の亡くなつた時、火葬にした灰を、その儘土に埋めるに忍びないから、こいつて、酒に浸してそつくり嚙み下してしまつたのは名高い話だ。

それと同じなのは、幕末頃に生きてゐた何こか三郎といふ男で、悪物食で評判を取つた程あつて、女房の叔母が亡くなるこ、火葬にして、其灰をアスピリンか何ぞのやうにすつかり嚙み下してしまつた。

夫を見た女房は木葉のやうに眞青になつて顔へ出した。

「まあ、何こいふ怖ろしい人なんだらうね、お前さんは。現在女房の叔母の骨を食べてしまふなんて、まるで鬼ぢやないか、もう／＼こんな家には一刻の間もじつしては居られない。」

こ女房は直ぐ表へ飛び出さうとした。三郎はその袂をじつ／＼押へて、にこにこ笑つた。

「そんなに怒るもんぢやないよ、お前がそんなに言ふんだつたら、これからお前の亡くなるまでは、もう人の骨など食べやしないから。」

三郎め、女房が亡くなつたら、またその骨を食べてしまはうと思つてゐたのだ。

## 馬の目潰し

馬政局長官——中將の談によるこ、陸軍當局では、先年の失敗に凝りずに、今度また馬券を賣出さうこ計畫中だこいふ事だ。

「何事も馬を善くするためだ、ちつ／＼やつつ人間が悪くならうが、そんな事位辛抱しなくつちや。」

こいふのは、當局者の考へらしい。成程考へてみるこ、人間は少し善くなり過ぎてゐる。人間が馬のやうに従順に、そしてまた馬のやうに立派な馬鹿者になりきつてゐるのに、肝腎の馬が人間のやうに亂暴で、加之に人間のやうな自由思想家であるこしたら、人間は少し位悪くなつても、

精々馬の方に氣をつけてやらなくちやならぬかも知れぬ。

馬をよくするのに、一つの方法がある。それは米國の馬商人が、馬市で取引をする折、賣物の馬に滅多に跳ねたり、飛んだり、不様な眞似をさせないで、

「見さつしやれ、牧師のやうに溫和しくしてまさ。」

さ、その溫和しいのを自慢に、成るべく高く賣りつけようが爲めに、發明した怖ろしい悪企みなのだ。

悪企みさいふのは外でもない、馬の眼に細い針を刺し通して、生れもつかぬ明盲にしてしまふのだ。盲になつた馬は、附近が見えないから、今までのやうに物に怯えて跳ねたり、飛んだりするやうな事はまるで無くなつてしまふ。

その手術さいふのが、また上手を極めるものださうで、みんなに氣を注げて檢べてみても、眼の中に少しの疵も見えない、十人が十人盲馬は知らないで高い金を拂つて購つて往くさうだ。

日本では人間を教育するのに、よく恚ういふ方法を使つて、成るべく廣い世間を見ないやうにしてゐる。そしてまた會社だの、工場では、そんな盲目の方が、仕事に都合が好いからさいつて

玉蜀黍

精々高い俸給を拂つて、この明盲を抱へようさ、——結構な事さ。

米國の國會議員に、キャノンさいふ、確かイリノイス州出の愛嬌たつぷりのお爺さんが居る。

爺さんは、性來齒が達者なので、何よりも撈ぎ立ての玉蜀黍を食ふのが一番好きらしい。

キャノン爺さんが、ある時華盛頓に慇々自分を訪れて來た田舎の選舉人を御馳走した事があつた。選舉人は頭の禿た老人で、自分達の選舉した代議士と差向ひに食卓に就くのが、何よりも愉快で溜らなかつた。

キャノン爺さんは、選舉人に色々珍しい料理を註文して呉れたが、自分は玉蜀黍しか食べなかつた。選舉人は出來立の牡蠣の油揚げを、口一杯に頬張りながら訊いた。

「キャノンさん、先刻から拜見してゐるさ、貴方は頻りに玉蜀黍を召し食つていらつしやるやうですが、お腹に悪ありませんか。」

「いや結構です。」さ、キャノンは前齒で大粒の玉蜀黍をほつり／＼嚙りながら言つた「ちう七本



も食べましたかな。『實際食卓の上には、玉蜀黍の食べ殻が七本轉がつてゐた。

やつとこさで、牡蠣の油揚を嚙み下した選挙人は、鶏の嘴のやうに、食物で汚れた唇を、ナブキンで拭き、言つた。

『附かん事をお訊き申すやうですが、キャノンさん、貴方此市で何の位の食代をお拂ひですね。』  
『さやう、一日に六弗でしたかな。』  
『玉蜀黍の好きな代議士は、皿に残つた今一本の好物を弄くりながら返事した。』

『それはまた滅法界に高い。』  
『選挙人は椅子を擦り寄せて低聲になつた。そんなに玉蜀黍ばかり食べてゐて、六弗は餘り勘定に合はな過ぎる。悪い事は言はんから怒つなさい、是からは貸馬車屋へ往つて、そこで玉蜀黍を買つて召し食るやうにね……』

流石に農夫の考へだけあつて一寸面白い。だが、廉い玉蜀黍も一度に七本ら食つちや馬が怒るかも知れない。

鶉

近頃補助貨がめつきり乏しくなつて、大阪の諸工場では、これに代用させる積りで、仕拂證明書こいつたやうな、一種の金券を職工に渡して遺贈つてゐるが、夫が紙幣類似證券取締法に抵触するこいつて喧しくなつてゐる。

むかし徳川の三代將軍時分に酒井讃岐守忠勝といふ老中があつた。賄賂を取るこ極つた其の頃の役人の間で、これはまた打つて變つた潔白者で、他人からの進物こいつても何一つ手にしなかつた。

その頃幕府の典藥に始終讃岐守の世話になつてゐる男があつて、お禮の印に何かな贈り度いこ思つてゐた。

『あの通り慾のない人だから、道樂の方から入つて往がなくつちや。』  
『色々聞かせてみるこ、讃岐守には何一つ道樂こいふ程の物はなかつたが、唯一つ鶉を飼ふのが好きだこいふ事が判つた。』

典樂は早速江戸中を探して素晴しく立派な鶉を買ひ込むだ。そして其の次ぎに讃岐守の前へ出た時、何喰はぬ顔をして鶉の話を持ち出した。

「御前、私近頃鶉のためにすつかり弱り切つてゐるのでございます。」

「ほう、何ういふ理由かな。」讃岐守は好きな鳥の話だけに膝を乗り出して來た。典樂は占めた腹のなかで小躍りした。

「親族の者から貰ひ受けましたものゝ、うるさく鳴き立てますので弱つてしまひます、で、近いうちに料つて食べようか存じます。」

「なに、料つて食べるつて。」讃岐守は眉を擧めた。「鶉の鳴聲はなか／＼風情のあるものぢや、料つて食べる段には雁でもよさうなものぢやないか、では怎う致さう、雁を乃公の方から遣はすから、其鶉を取り替へては呉れまいか。」

「然う願へますれば、此の上の仕合せはございません。三日でも飼つてみるゝ、憐れが添はりまして。」

典樂は鶉のやうに背を圓めてお辭儀をした。そして其の次ぎの日、大事な鶉籠を讃岐守の邸に

持ち込んで來た。

讃岐守は其の鶉の聲を聴いて、初めて吃驚した。

「これは大した掘出し物ぢや、典樂め、物知らずにも程があつたものぢや。」

「氣持善ささうに聲を立てゝ笑つた。そして會ふ人毎に其の掘り出し物を自慢したものだ。するゝ、誰言ふさなく其の鶉は典樂が大金を出して、買込んだものだといふ事が傳はつて來た。」

讃岐守はさつゝ顔色を變へた。そして鳥はその儘出入の者に呉れてやつて、その後は死ぬるまで鶉を聞かうなゝは噓にも言はなかつた。

工場の持主に教へる、補助賃が乏しかつたら、その代りに鶉を呉れてやつたら可からうぢやないか、鶉は賣つて錢に替へる事も出来るし、煮て羹にする事も出来る。

### 幽霊の芝居見

この頃、歐羅巴の西部戦線にゐる英軍の塹壕内では、キツチナア元帥が捕虜になつて獨逸にゐるこいふ噂が頻りにある。前線で俘虜になつた獨逸兵のなかには、伯林の捕虜收容所で、怖しく

背の高い元帥の後姿を見かけたさいふものが少くない。オウクネエ島附近で溺死した元帥が、今頃蘇生つてゐる筈もないが、それでも誰も見た、彼も見たと言ふからには、之も満更嘘ださばかしは言はれない。

先年オスカア・ワイルドが巴里の汚い宿屋で窮死した時も、其後二三ヶ月経つてから、彼方此方の町でワイルドを見掛けたさいふ人がちよいとあつた。

伊勢は寂照寺の畫僧月僊は、乞食月僊と言はれて、幾萬さいふ潤筆料を蓄め込んだ坊さんだがその弟子に谷口月窓さいふ男がゐるた、沈黙家で石のやうに手堅い性れつきであつた。

沈黙家ではあつたが、世間並に母親が一人あつた。この母親がある時芝居へ往く、隣棧敷に豫て知合の某さいふ女が來合せてゐた。その女は大の芝居好きで、亭主に死別れてからは、俳優の顔ばかり夢に見るさいふ風な女であつた。

その日も二人は夢中になつて、芝居や俳優の噂をした。翌る日になつて、月窓の母親が挨拶かた／＼その女を訪ねてゆく、鼻の尖つた嫁さんが出て來て不思議さうな顔をした。

「阿母さんですか、阿母さんは貴女、亡くなりましたから、今日で三月餘りにもなりますよ。」

「え、お亡くなりですつて。でも、私は昨夜芝居でお目に懸りましたが……。」  
 「まさか。」といつて嫁さんは相手にしなかつた。そして何うかするさ、此方を狂人扱ひにしさうなので、月窓の母親は黙つて歸つたが、道々躑躅は地に着かなかつた。

### 京都と偉人

京都のある學校にYさいふ倫理の教師があつた。英國の母親は子供を教育するのに、自分の母親が自分をしつけて呉れた通りにし、米國の母親は、自分が子供の時母親に仕て貰ひたかつたやうに、吾が兒を教育するさいふ事だが、倫理の教師さいふものは、自分にするのは厭な癖に、他には何かと難かしい事をさせたがるものだ。

Y氏は教壇の上から、居並んだ生徒を見下した。生徒は蛙の子のやうに、臍なぞ持つて居ないやうな顔をして、几帳面に膝の上に手を置いてゐた。

「どうも京都人は意氣地が無くつて可かん。」とY氏は一段ミ聲を張りあげた「その證據には、京都からは偉い人物といつては少しも出て居らん。奈翁は百戰百勝の英雄だつた。ニウトンは地球

の重力を發明した。カントは素晴らしい哲學の本を書いた。ベエトオヴエンは弾になつた。ミレエは腹が減て饑いと言つた。そして是等の偉い人物は、誰一人京都から出はしなかつたぢやないか。』

Y氏は京都人の饗應が悪かつた許りに、奈翁やミレエが佛蘭西へ逃げ出したやうに言つて、京都生れの生徒を責め立てた。生徒達は濟まなかつたやうに、そつと溜息を吐いて、先生の嚴つべらしい顔を見た。

Y氏は石版刷の奈翁のやうに、腰に拳をあてがつて、ぐつミ反身につて教壇をあちこちした。

『それとも、京都から出た人に、もつミ偉いのあるミでも思つてゐるのかい、諸君は。』

Y氏は怒う言つて、じつミ蛙の子の顔を見た。

『あります。』ミ蛙の子の一人がいきなり突立つて答へた。

『誰だ、誰だね、早く言つてみなさい。』ミ、Y氏は促き立るやうに言つて、ぐつミ肩を聳やかした。

『申すには申しますが、餘り恐れ多くて……。』

生徒は怒う言ひすてて身體を真直にした。

『判つた。判つた。後はもう言はなくてもいい。』教壇の上の奈翁は、兩手をちやんミ揃へて鉛筆のや

## 賭博家

うに棒立にかつた。そして泣出しさうな聲で言つた、『成程京都からもお偉い方が出てゐられる。』

堂島の仲買人會我某氏が、いつぞや帝國飛行協會に一萬圓を寄附した事があつた。その緣故である時飛行熱心のN陸軍中將が、堂島の仲買業者を集めて一寸した話をした事があつた。

中將は蟋蟀のやうな長い髯を捻りながら言つた。

『日清、日露兩戰役に於ける吾輩の經驗によれば、相場を行つた者は、他の者に比べて、軍人としての成績が一體によかつたやうだ。彼等は平素一か八かの勝負をやりつけてゐるので、度胸が据わつてゐる……。』

夫を聞くミ、居合せた相場師は、急に立派な軍人になつたやうな氣で、互に顔を見合はせた。そして何處かで素晴らしい手柄でもしたやうに思つて、夫を考へ出さうとするらしかつたが、さうしても頭に浮んで來なかつた。それも其の筈だ、彼等はみんな體格不良で兵役を免除された輩だつたから。

中將は響蟲のやうに、サアベルをがちやがちや言はせた。

『その度腕の据わつてゐるところが、やがてまた諸君をして立派な飛行家ならしめるに相違ない。相場師ミ飛行家——吾輩はいつも此の兩者を結びつけて考へてゐる者である。』

夫を聞くに、皆は急にまたいづばし偉い飛行家になつた積りで、宙返りでもした後のやうに、そつち自分の額を撫でゝみた。額の中では下流りな米の相場がこびりついて取れなかつた。皆は中將の言ふ様に、飛行家になるのだつたら相場で大穴を明けた後でも遅くはあるまいと思つて、深つたさうな顔つきをした。

N 中將に教へる。文豪アナトオル・フランスの書いた話に慍ういふのがある。賭博打が二人船のなかで賭博をしてゐるに、急に嵐が起つて船は引つ續り覆されてしまつた。二人は浪のなかを泳ぎ廻つた末、やつこの事で黒い島のやうなものに縋りついた。それは鯨の背であつた。二人はその背を跨ぐに、いきなり洋袴の隠しから骰子を掴み出した。そして、

『さあ来た、一勝負やらかさう。』と言つて、直ぐ賭博を始めたさうだ。

鯨の背を利用する事の出来る賭博打は、飛行機の席をも利用する事を知つてゐる筈だ。孰方も

危険が附き纏つてゐるだけに、興味は一段深からう。

食卓語

米國の石油王ロックフェラーは、減多に公の宴會へ出ない、達て招待でもされるに、まるで法廷にでも引き出されるやうに、苦り切つた顔をして入つて来る。

ある人が石油王に對つて、

『何故貴君はそんなに公の宴席をお嫌ひになるのです。』

と訊くに、ロックフェラーはちやうど寄附金でも出し惜みをするやうに、怠儀さうに口を開いた。

『第一私は他人様のやうに餘りたんに食べません。それに外の人達は、食事が済んでゐても、まだお喋舌をするために、じつと食卓についてゐる。私の考へでは、食後のお喋舌といふものは、自轉車の車輪のやうなもので、長ければ長いだけ疲労が大きくなる。』

ロックフェラーの積りでは、疲労を護謨輪にもじつた言葉の洒落らしいが、實際食後のお喋舌は、何うかするに聴衆をけんなりさせて、お腹の消化まで悪くさせるものだ。

今佛蘭西に都を遷してゐる白耳義國王が皇后と連れ立つて、いつだつたか自國の詩人達が組織してゐる文學會に出掛けて往つた事があつた。するに、その挨拶の任に當つたのが、他でもない先日汽車に轢かれて亡くなつた詩人ヴェルハアレンであつた。

ヴェルハアレンは落つた態度で起ち上つた。皆は名高い詩人の事だ、そんな素晴らしい挨拶をするだらうか、片唾を飲んで待ち設けた。

ヴェルハアレンは、靜かに透きこほるやうな聲で、

『白耳義國王陛下並に皇后陛下……』

一言言つた。兩陛下は言ふに及ばず、一座の者は、詩人がそんな言葉で後を繼ぐだらうか、膝中を耳をやうにして凝まつてゐた。

十秒経つた。二十秒経つた。一分経ち、二分経つても、ヴェルハアレンは何一つ後を言ひ足さなかつた。見るに、いつの間にか、ちやんこ椅子に腰を下してけりりとした顔で済ましてゐた。

茶 入

小堀遠州といへば、茶人切つての技巧家だが、實世間の世渡りも萬更ではなかつた。見えて、徳川の二代將軍秀忠にも氣に入つて、茶事といへば屹度相談を受けたものだ。

遠州は茶器の鑑定が巧かつたので、將軍はいつも大金をこの男に委せて、色々な名器を集めさせた。ところが遠州はその金を一萬兩ばかり自分の用に費ひ込むだ。

公儀の預り金を一萬兩も費ひ込んだらあつては、家は斷絶に定まつてゐるが、遠州ほごの名人をそんな羽目に會はすのも氣の毒だつた。で、井伊掃部頭と酒井左衛門尉とが仲に立つて、一萬兩は綺麗に償つて呉れた。茶人にしても、罪人にしても、親切な友達を持つた方が都合の善い事が多いものだ。

遠州は二人に何がなとお禮をしたいものだと思つた。遠州は男だつたから、他人の親切を被ながら、女のやうに唯嚙を見せて済ます譯にも往かなかつた。で、自分の秘藏のなから茶器を二つ取出して、親切な二人に贈つた。酒井家が貰つたのは、

「飛鳥川」ミ銘の入った茶入、井伊家の宗祇の歌たつた。

「飛鳥川」の茶入は、遠州がまだ若い頃京都で掘り出したものだが、その時分には、  
「使ふにはまだ新し過ぎるから。」

「言つて、大事に藏ひ込んで置いて、後に塚に来てから取り出して見て、  
『ほう、恰も使ひ頃になつてるわい。』」

ミ、箱書に「昨日ミ過ぎ、今日ミ暮して飛鳥川流れて早き月日なりけり」ミ認めて、その儘使ひ  
ならしたものだつた。

茶入にも使ひ頃がある。人間にも夫が無い事はない。さりわけ女を取扱ふには、何よりも先に  
其の骨を覚えなければならぬ。女は茶入ミ同じやうに、結構な藝術品だからである。

臆病な象

寺内内閣が新思想や裸體畫を怖がるやうに、象ミいふ動物はひびく鼠を恐れる。尤もそれは  
鼠が風俗を素すこか、または象に賃金があるからこいふ爲めではなく、鼠の恰好が Chacanas ミい

ふ小さな動物によく肖てるからださうだ。

Chacanas ミいふ動物はごんな恰好だかよく知らないが、象が晝寝でもしてゐるミ、あの長い鼻  
を傳つて、ちよろちよろミ背に駈けのぼり、錐のやうな鋭い爪でもつて、皮膚に傷をつけ、そこ  
から毒を注して、終ひには象を斃死させるやうな事を仕出來すこいふ事だ。

象はこの悪戯者が背に這ひ上つたミ氣がつくミ、鼻を揮りまはして、大暴れに暴れ出すが、  
Chacanas はそんな事には少しも驚かない。象が怒れば怒るほご、しつかり背に嚙りついて離れな  
い、そして鋭い爪でもつて、段々ふかく食ひ込んで往くのだ。

鼠の外貌がこの悪戯者に似てゐるのは、飛んだ幸福で、名もないちんちくりんな野鼠までが、  
長い口髭を捻りながら象を脅かす事が出来るのだ。

象は那の大きな圖體でゐて、よくいろんな物を怖がる。むかし徳川の八代將軍の頃、和蘭人が  
象を連れて來た。誰よりも先きに將軍家に御覽に入れなくつちやこいふので、象は引張られて常  
磐橋からお城に入らうとした。  
象だの、荷車だのこいふものは、よくお役人の手拔りの穴へ脚を突込むもので、その頃常磐橋

にも橋板のひき損じた所があつた。象は危くそこへ片足を踏込んで、横つ倒しに倒れた。そしてニコラス皇帝のやうな悲しうな顔をして涙ぐんだ。

この大きな獣は漸次助け上げられて、無事に將軍家にお目に懸ることが出来た。その折象は役人の手拔りを直訴しようまで思つたらしいが、役人といふものは、Chaanas よりもつ長い爪をもつてる事を思ひ出したので、すつかり断念めてしまつたらしかつた。

それからいふもの、この獣は橋を見る度に、ひき物恐れをして、さうかするに尻込みをしたさうだ。象のため斷つておくが、それは橋を怖れたのではない。こわいのはお役人の手拔りなのである。

### 伍廷芳の皮肉

支那の伍廷芳が、全權公使として米國に駐つてゐた頃、ある日招待せられて市俄古に往つた事があつた。伍廷芳は尻尾のやうな辮髪を後に吊下けて出掛ける事を忘れなかつた。

伍廷芳は逢ふ人毎に、こりわけ婦人さへ見れば、支那人に持前のお愛嬌をふり撒いた。着飾つ

た婦人連のなかには、九官鳥に挨拶されたやうな、變な表情をして顔を見合はせたのもあつた。折柄そこへ來合はせたのは一人の紳士で、伍廷芳は初めての對面だつた。紳士は無遠慮に言つた。

『伍廷芳さん、近頃お國には貴方がしておいで、尻尾のやうな辮髪を廢めようつて運動が起きているさうぢやありませんか、結構ですね。』紳士は一寸辮髪の先に觸つてみた。『それなのに、何だつて貴方は、こんな馬鹿げた物を下けてお居でになるんです。』

『さあ。』伍廷芳はじろり相手の顔を見た。紳士は鼻の下にもじやもじや三口髭を伸ばしてゐた。『何だつて、貴方はそんな馬鹿けた口髭なぞ生やしてお居でになりますね。』

『これは御挨拶ですね。』紳士は苦笑した。『これには理由があるんです、私は口許が悪いもんですから、それで……。』

『さうでせう。然うだらうと思つた。』伍廷芳はにやりこもせず疊みかけた。『貴方が仰有る事から察するに、何うも餘りお口許が好い方では無いやうだから……。』



懸賞短篇小説

最近米國のある雑誌の主催で『短篇小説競技會』といったやうなものが催された。一體短篇小説は、この程度まで文字が切詰られるものかといふ、言はゞ一種の悪戯から思ひ立たれたものだ。應募原稿は總て三萬餘通、世界の各方面から送つて寄されたもので、なかには佛蘭西の聖壇のなかで書いた物さへあつた。内容には色々な世界を描してゐるが、秀れたものは、矢張り戀愛と戦争を書いたものに多かつた。

唯一の規定は、『總語數一千五百以下たるべし』といふ一箇條で、之より長いものは取上げない。原稿料は無論拂つたがその拂ひ方が随分奇抜で、書かなかつた物にだけ拂ふといふ約束なのだ。こいふのは、應募原稿が規定の千五百語より少かつた場合には、その少い語數だけ一語十錢の割合で原稿料を拂ふのだ。だから、千五百語ほつきりで書き上げた人は、どんな立派な短篇小説を書いたつて、錢一文も貰へない。もしか夫を千四百九十語で書き上げてゐたら、一弗だけ貰ふ事が出来るし、たつた十語で済す事が出来たら、百四十九弗貰ふといふ勘定だ。

數多い應募原稿のうちで、一番長いのが千四百九十五語で、その作者は原稿料大枚五十仙を貰つた、一番短いのは七十六語で、その作家は雑誌社から、百四十二弗四十仙を貰つて、にこ／＼してゐたさうだ。

もしか、こんな事が日本で出来たなら、多くの不仕合せな女は、自分が持合せてゐる離縁狀を書留郵便で送つたがよからう。たつた三行半で、あれだけ意味の長い物語は、どんな小説家だつて書きやうがない。應募者は少くも百四十二弗四十仙位は手に握れる勘定だ。それだけあつたら、第二の夫をみつける支度に不足はない筈だ。

皮 肉

英國のウィンザー王宮の皇室圖書館に、毎月の雑誌が取揃へてある雑誌棚がある。その雑誌棚の上に、現代の名高い人達の寫眞帖が幾冊か載かつてゐる。寫眞帖はその人達は職業によつて夫々別になつてゐる。

今の英國皇太子がまだ幼かつた頃、ある日その雑誌棚の前へ来て、多くの寫眞帖のなかゝら、

「各國民元首帖」を引張り出してじつと見てゐた。

夫には胸一杯びか／＼する勳章を下けてゐる人が多かつた。なかに唯一人質素なフロックコートを着て、苦り切つた顔をしてゐる男があつた。皇太子は夫を見るに、後を振かへつた。後には父君のジョオジ陛下が立つてゐられた。

「阿父様、これ誰方なの。」

「夫は米國の大統領ルウズヴェルト氏だ。」

皇太子は可愛らしい指先で、ルウズヴェルト氏の鼻の上を押へた。氣難しやの大統領は嘘をしさうな顔になつた。

「阿父様、この人惻怛者なの、それとも馬鹿？」

「さうだな。」とジョオジ陛下はにこ／＼笑つて「ルウズヴェルト氏はなかく／＼偉い方だよ。まあ天才でも言ふ方だらうて。」

それから四五日経つて、ジョオジ陛下が何か見たい事があつて、その「各國民元首帖」を開けてみるに、ルウズヴェルト氏の寫眞だけ取り外されて見えなかつた。

「訝しいな。」

と言ひ／＼、何氣なく側にあつた「現代人物帖」を取り上げてみるに、その第一頁目に失くなつたルウズヴェルト氏の寫眞が挿んであつた。

陛下は皇太子を召された。

「この寫眞を移したのはあんたかい。」

「私よ。」

「何か理由があつたのかい。」

「だつて阿父様、先日お話しになつたぢやないの。」と皇太子は自慢さうに言つた。「ルウズヴェルトさんは天才だつて。だから私元首帖から引こ抜いて人物帖の方へ入れた。夫が悪くつて、悪かつたら勘忍して頂戴……。」

### 青磁の皿

むかし鴻池家に名代の青磁の皿が一枚あつた。同家ではこれを廣い世間になつた一つしか無い

寶物ミして、土蔵にしまひ込んで置いた。そして主人が氣が鬱々するミ、夫を取り出して見た。すべて富豪ミいふものは、自分の家に轉がつてゐる塵つ葉一つでも、他家には無いものだと思ふミ、夫で大抵の病氣は癒るものなのだ。

ある時鴻池の主人が、好者の友達三人と一緒に、生玉へ花見に出掛けの事があつた。一獻掬まうさいふ事になつて、皆はそこにある料理屋に入つた。

亭主は豫々最辰になつてゐる鴻池の主人だミいふので、料理から器まで凝つたものを並べた。そのなかの一つに、例の祕藏の寶物ミ同じ青磁の皿に、一寸した摘み肴が盛られたのがあつた。鴻池の主人は、吃驚して皿を取り上げて見た。擬ふ方もない立派な青磁である。側にゐる誰彼は、幾らか冷かし氣味に

『ほほう、結構な皿や、亭主、お前ミこはほんまに偉いもんやな。鴻池家で寶のやうに大事がつゝる物を、突出しに使ふのやよつてな。』

ミ、賞めあげたものだ。

鴻池の主人は、皿を掌面に載せた儘、凝ミ考へてゐるが、暫くするミ亭主を呼んで、この皿を

譲つてはくれまいかミ、疊の上に小判を三十枚並べた。亭主は吸ひつけられたやうに、小判の顔を見てゐるが、暫くするミ、忘れてゐるやうに、慌て、承知の旨を答へて、小判を懐中に捻ぢ込んだ。

鴻池の主人は夫を見るミ、掌面の皿をいきなり庭石に叩きつけた。青磁の皿は小判のやうな音がして、粉々に碎け散つた。鴻池の主人は飲みさしの盃を取り上げながら言つた。

『那の皿は家の物ミそつくり同じやつだ。同じ青磁の皿が世間に二つあるやうでは、鴻池家の顔に關はるよつてな。』

そして眉毛一つ動かさうしなかつた。

## 高 い 塔

XX美術學校で西洋美術史を受持つてゐる人に、Kミいふ若い學者が居る。そのK氏が學校の生徒に口頭試験をやつた事がある。その時一人の學生の順番になつた。その學生は級のなかで畫の上手ミして聞えてゐる男だつた。

K氏は嚴へらしい口をして訊いた。

「君はバビロンの塔を知つてますか。」

學生はそんな物はてんで頭にも置いてゐないらしく、即座に返事をした。

「知りません、バビロンの塔だなんてものは。」

「何かの本に無かつたですか。」K氏は自分の講義録にあつたのを思ひ出させようとして、

「本」さういふ語に力を入れて言つた。

「有つたかも知れませんが、覚えてゐません。」

學生はきつぱり答へた。

K氏は少し狼狽氣味になつた。

「誰かに聞いた事はありませんか、學校の講堂か何處かで。」

「ありません。」學生は蒼蠅さうに言つた。「先生、私は畫家ですが、バビロンの塔なんか知らなくても、畫は描けると思ひます。私はまた基督教信者ですが、そんな塔なぞ知らなくても、天國へ往けると思ひます。」

K氏は帽子刷毛で鼻先を撫下されたやうな顔をした。成程考へてみるに、自分はバビロンの塔を知つてゐるが、それを知つてゐるから言つて、畫は巧く描けさうにも思へない、夫に逆も天國へまで往けさうにも思へなかつた。K氏は試験はこの儘で止めようかとも思つたが、尋でに今一つ訊いてみた。

「だが、まあ考へてみたまへ、バビロンの塔だよ、塔さういふからには……」

學生は漸く思ひ出したらしく、急ににこ、／＼して、

「いや解りました。塔さういふからには高い建築物でせう。」

「さうだ、よく覚えてゐたね。」

二人は寒山と拾得のやうに聲を合せて笑つた。

### 獨帝の癖

獨帝には妙な癖がある。それは何か困つた事に出會すに、直ぐ自分の耳朶を引張らずには居られないといふ事だ。

大分以前の話だが、獨帝には祖伯母さんに當る英國の并クトリア女皇が崩くなられて、葬儀の日取が電報で獨帝の手許へ報されて來た事があつた。その折獨帝は六歳になる甥を相手に、何か罪のない無駄話に耽つてゐた。

獨帝は侍従の手から電報を受取つたが、なかに何か氣に入らぬ事でも書いてあつたものか、獨帝は英吉利と英吉利人が大嫌ひであつた。直ぐいつもの癖を出して、自分の耳朶をいやさいふ程引張つた。

夫を見てこましくくれた甥は言つた。

「伯父さん、何だつて、そんなに耳を引張るの。」

「うむ、一寸困つた事が出來たので。」

「困るも、伯父ちゃんはいつても耳引張るの。」

甥は不思議さうに訊いた。

「さうぢやく、獨帝は、じつと電報の文字に見惚れながら答へた。」

「そんなら、もつと困る事があつたら、伯父ちゃん何うするの。」

「その時はな。」獨帝は電報を卓子の上に投げ出して、その手でいきなり甥の耳を撮むだ。「その時は焦つて他人の耳を引張つてやるのぢやく。」

講和問題で甚く弱り切つてゐる獨帝は、今度は誰の耳を撮んだものか、じろじろ四邊を見廻してゐるに相違ない。「正義」の大商人ウイルソン氏など、よく氣を注げない、兎のやうな耳朶を千切れる程引張られるかも知れない。

臍 無 し 男

箏曲家の鈴木鼓村氏が、ある時備中の倉敷にゐる一人の友人を訪ねた事があつた。其處へ往くには、是非村境を流れてゐる高梁川の渡し場を越さねばならなかつた。

渡し場の船頭は、大きな圖體に胴股を着け、冠を被た鼓村氏の姿を見て、天國から墜ちて來た人でもあるかのやうに、目を腫つて吃驚した。

「貴方は何誰様で御座いますな。」

船頭は長らく訊いた。

鼓村氏は剽軽な、間に合せを言ふ事にかけては、立派な藝術を持つてゐる男だ。誰でも可いから氏に、

「君の腹は恰で粉袋のやうに膨れてゐる、屹度臍なんか無いんだらう。」

「言つて見るがいゝ、氏は屹度大きな掌面で、下つ腹を押へた儘、低聲になつて、

「よく知つてゐるね、誰にも言つて呉れちや困るが、實際僕の腹には臍が無いんでね……」

「眞面目になつて言ふのに極つてゐる。」

「貴方は何誰様で……」と船頭の言葉を聞いた瞬間、鼓村氏はすつかり其の何誰様になつてしまつた。

「俺かの、俺は京都から来たものぢやが、この村にSといふ男が居るかの。」

鼓村氏は芝居の臺辭がかつた調子で言つた。

「はい、居りますでございます。」

「俺は其Sといふ男に位を授けに下つて来た者ぢや。」鼓村氏は、自分でももう實際宮内省から来た者の様に思つてゐた。

「粗忽があつてはならんぞ。」

「御苦勞様に存じます。」船頭は船底に蟲のやうに平べつたくなつてゐた。

鼓村氏は二三日其の友人の許で遊んだ、歸途に其渡し場を通るに、矢張り同じ船頭が待つてゐて、慌てゝ頬冠りを取つた。その瞬間鼓村氏は二三日前の悪戯を思ひ出した。で、嚴べらしく言つた。

「船頭、位は無事に授けたぞ。この後こそSは大事にして遣はせ。」

「畏まりましたでございます。」

船頭は、おつかな吃驚に鼓村氏を乗せて水を渡つた。鼓村氏は舷から蛙のやうな恰好をしてびよいこ向う岸に飛んだ。

お蔭で氏は渡し錢を拂ふ面倒を免かれた。船頭も無論そんな事は思つてゐなかつた。のみならず、友達のS氏にまで、其の後二三ヶ月Sといふもの、どうしても渡し錢を貰はうしなかつた。

## 襟飾

マアク・トエンミいへば、米國の名高い滑稽作家だが、この小説家が女流作家のストウ夫人に隣合せに住んでゐた事があつた。

マアク・トエンは閑さへあれば、ストウ夫人の許へ出掛けて往つて、夫人に娘さんミを相手にお喋舌に耽つたものだが、一向無頓着な男だけに、何うかするミ、寢衣の儘飛び出したりするの

で、その都度細君の不機嫌を買つたものだ。

「貴郎その身態は何ですね。襦袢が綻びてゐるぢやありませんか。」

するミ、この小説家は小娘のやうに顔を紅らめながら、

「や、飛んでもないこつちや、俺は何だつてこんなに粗忽者なんだらう。」

ある朝も、トエンは例のやうにストウ夫人を訪ねてお喋舌をした。そして上機嫌になつて口笛を吹き／＼歸つて來た。するミ入口に細君が衝立つてゐて、亭主の姿を見るなり、鶯鳥のやうに

我鳴り立てた。

「貴郎、そんな身装をしてお隣家へ往つてらしたんですか、襟飾もつけないで、何てまあ禮儀を知らない方なんでせう。」

小説家は一寸立停つて、情ない顔をしたが、その儘一言も言はないで書齋に入つて往つた。そして二三分するミ、女中を呼んで小さな箱を隣りのストウ夫人の許まで持たせてやつた。

夫人は不思議さうに箱を開けてみた。なかには黒い襟飾に手紙が一本添へてあつた。

「これが私の襟飾です。さうぞ手に取つて御覽下さい、私は今朝三十分ばかりお邪魔をしたと思ひますから、三十分程御覽になつたら、直ぐ御返しを願ひます。實は襟飾ミいつては、これ一つなんですすから。」

ストウ夫人は命令通り三十分程襟飾を見てゐた。その間に煮物が焦げついたか何うかは、私

知つた事ではない。

缺 け 皿

日本の遣英赤十字班が英國へ渡つた時、自惚の強い英吉利人は、『日本にも醫者が居るのかい。』

さいつたやうに、甚く珍しがるやうだつたが、決して歓迎はしなかつた。

一行の食事は一人前一個月百圓以上も仕拂つたが、料理はお粗末な物づくめであつた。ある時なき、態々縁の缺けた皿に肉を盛つて、卓子に並べた事があつた。夫を見た皆の者は、純になつて腹を立てたが、あいにく腹を立てた時の英語は、掻いくれ習つてゐなかつたので、何と切り出したものか判らなかつた。

一行の通辯役に聖學院のO氏が居た。氏は英語學者だけに、腹の減つた時の英語と同じやうに腹の立つた時の英語をも知つてゐた。氏は給仕長を呼んだ、給仕長は鶯鳥のやうに氣取つて入つて來た。

『この皿を見なさい。こんなに壊れてゐるよ。』O氏は皿を取上げて『贗造銀貨のやうに給仕長の

目の前につきつけた。『日本ではお客に對して、こんな毀れた皿は使はない事になつてゐる。で、餘り珍しいから、紀念のため日本へ持つて歸りたいと思つてゐる。幾らで譲つて呉れるね。』

給仕長は棒立になつた儘、目を白黒させてゐた。O氏は疊みかけて言つた。

『幾らで譲つて呉れるね、この皿を。』

給仕長はこの時漸々持前の愛嬌を取かへた。そして二三度頭を掻いてお辭儀をした。

『この皿はお譲り出来ません、日本のお客様の前へ出た名譽の皿ですもの。』

言つて、引手繰るやうに皿を受取つた。そして夫れ以後、縁の缺けない、立派な皿を吟味して二度も以前のやうなを出さうとしなかつた。

リンカンの戯談

リンカン云へば、亞米利加中の人間の苦勞悲しみを、自分一人で背負ひでもしてゐるやうな、氣難かしい、悲しうな顔をしてゐるが、時々軽い戯談口をきく程の心の餘裕は持つてゐた。



將軍キルソンが、或時コネチカットの議員を仕てゐる自分の義弟某、リンカン大統領を訪ねた事があつた。キルソンの義弟といふのは、身の丈七尺もあらうこいふ背高男で、道を歩く時には、お天道様が頭に支へるやうに、心持背を屈めてゐた。

リンカンは應接室に入つて来たが、室の中央に突立つてゐる背高男が目につく、挨拶をする事も忘れて、材木でも見る様に靴の爪先から頭に掛けて、幾度か見上げ見下してゐた。材木は大統領の頭の上で馬の様にや／＼笑つた。

「大統領閣下、お初にお目に懸ります。」

「や、お初めて。リンカンは初めて気がついたやうに會釋をした。早速で甚だ無駄なやうだが一寸お訊ねしたいと思つて……」

背高男の議員は、不思議さうな顔して、背を屈めた。

「何なりとも、閣下。」

大統領は口許をにやりこした。

「貴方は随分お背が高いやうだが、何うです、爪先が冷えるのが感じますか。」

「へ、……御冗談を。」議員は頭を掻いて恐縮した。

髻の有無

詩人T氏が、同志社女學校で比較文學の講義をしてゐた頃、講話の序から話題が「文學者」のこいふ事に及んで来た。

T氏は詩人藝術家のすべて傑出してゐる人達には、定つたやうに髻がないこいふ事を説き出した。氏はその例として、ダンテ、ゲーテ、シルレル、ミルトン、シエリイ、キイツ、芭蕉、馬琴、葉林子……なまこいふ名家を引張り出して来た。

談話に聽かされてゐる女學生は、恚ういふ詩人の肖像を頭のなかで描き出してみた。大抵安雑誌の口繪で見覚えてゐるので、誰も彼もが天然痘を患つたやうな顔をしてゐるが、實際髻の無い事だけは確かであつた。

女學生は詩人や藝術家のなか、髻の無い例を探り出すのが面白くなつて、てんでに自分達の記憶から色々な人達の口元を思ひ浮べて見た。

「禁式部、清少納言、デヨオヂ。エリオット、クリスチナ・ロセッチ……成程ほんみやわ、みんな髻があらへん。『若い娘達は感心したやうにT氏の顔を見た。成程この人にも髻さいつては一本も生えてゐなかつた。』

女學生の眼は言ひ合はしたやうに、T氏の立つてゐる講壇の後方に注がれた。そこには寫眞版のロングフェロオの肖像が掛つてゐる。夫を見るに、皆は一度に聲を揚げて笑ひ出した。

T氏は何気なく後方を振向いてみるに、ロングフェロオが悪性の風邪でも引込んだやうに、鬚髪をもじやく／＼生やした儘、後で苦り切つてゐるのが目についた。

氏は一流の抜き下すやうな調子で「うん。この男が一人髻を生やしてゐる。だが、これなぞ小詩人の事だから、全で問題になりませんよ。」

此談話を聞いた女學生は、今ではそれ／＼菓立をして、人の細君になつてゐるが、誰一人詩人や藝術家には嫁いてはゐないらしいから、髻の有無は餘り問題にはしてゐない。實際髻なきは何うでも可い、問題は尻尾の有無である。女の嫁きたがる男には、狐の樣によく尻尾を引摺つてゐるのがある。

猶太人と狗

マリイ・アンチンといふ猶太種の女は、火のやうな激しい性格で、今アメリカの各地で頻りに演説をして歩いてゐる。その演説といふのは、猶太人が傳説的に持ち傳へてゐる、神様がお約束の理想郷は、他でもない亞米利加の事だといふのだ。

成程聞いてみるに、尤もな話で、亞米利加には、猶太人の好きな金は有り餘る程あるし、口喧しい神様は居無いし、加之に男はみんな女に親切だといふから、猶太種の女が理想郷にするに打つて附けの土地柄だ。そして今一ついゝ事には、亞米利加人といふ奴は、こんなお世辭をいふに、極つたやうにこゝ／＼して、

「マリイ・アンチンはよく物の解つた女で、加之に素敵な美人だ。」

この女が、最近土耳其から歸つたばかりの男の友達に何處かで會つた。男は色々な面白い旅行話を聞かせた後、指の節をほき／＼鳴しながら、

「さうだ、忘れてゐるだが、土耳其には面白い二つの習慣があるんですよ。」  
 ミ妙に調子をはさませて話し出した。  
 「それはね、猶太人ミ狗だミ見るミ、ふん捕へるなり、直ぐ叩き殺してもいゝんですさ。」  
 マリイ・アンチンの圓い顔は銀貨の様に眞青になつた。  
 「まあ、仕合せだつたわね、貴君や私がそんな國に住んで居なかつたのはね。」  
 男の友達は眼を圓くして吃驚した。自分は猶太種ではない。してみるミ、相手は自分を狗ミ間違へてゐるのだと思つて……

三十一文字

Mミいふ心理學者が、大學の教室で心理學を講義をしてゐた時、何かの例證を和歌から引いた事があつた。(和歌ミいふものは、手際よく例をひくミ、早天に雨を降らす事も、借金の日限を延ばす事も出来るものなのだ。)  
 心理學者はフロックコオトの隠しから、黻くちやな手帛を取出して、一寸涕をお拭つた。

そして、例の几帳面な調子で、  
 「一體和歌ミいふものは、諸君も御存じかも知らんが、三十一文字ミいつて、ちやんミ三十一字から成立つてゐる。茲に一つ例をあけるミ……」  
 ミ心理學者は一寸言葉を切つて、記憶から手頃な歌を一つ探り出さうとした。  
 甜瓜の恰好をした學者の頭のなかには、歌ミいつては『百人一首』が二つ三つ轉がつてゐるに過ぎなかつた。學者は頰鬚を指で押へた儘じつミ考へ込んでゐるミ、都合よく道眞公の歌がひよつくりミ滑り出して來た。  
 「茲に一つ例をあけるミ……」ミ心理學者は繰返して、名高い百人一首にある歌だが、丁度三十一文字で出来てゐる」ミ丁寧な指を折つて數へ出した。  
 「菅家、このたびは幣もさうあへず手向山……」  
 歌を下の句まで誦んでしまふミ、忠實な學者の指は、三十五文字を數へてゐた。夫に何の不思議があらう、歌は第二句目で一字延びてゐる上に、心理學者は『菅家』ミいふ名前までも數へ込んでゐるのだから。

學者は數へた片手の中に浮けたまゝ、世間が厭になつたやうな顔をして棒立になつてゐるが、暫くするごとく唾を飲み込んだ。「あゝこはれ字餘りでした。和歌にはちよいと字餘りといつて、普通のより文字が延びてゐるのがあります。丁度猿に尻尾の長いのであるやうなもので。」高芙蓉がある時弟子を集めて、蒙求の講釋をしてゐた「車胤集螢」の章になるに、高芙蓉は肝腎の車胤の事などは忘れたやうに、これまで自分が見て來た方々の螢の話を出した。そして最後に宇治の螢を引張り出して「那處の螢は大きいね、さやうさ、雀よりもつみ大きくつたかな何しろ源三位頼政の亡魂ださいふんだからな。」

と吹いてゐたさうだ。笑つては可けない。先生さいふものは、大抵こんな事を教へるやうに出來てゐるものなのだ。

道 樂

郵便切手を集める——さいふに、何だか子供染みた事のやうに思ふものがあるかも知れないがなか／＼何うして、切手の蒐集は、文展の審査や、煙草の專賣やと同じやうに、立派な堂々たる

帝王の事業で、其の證據には英國のジョージ皇帝陛下が、大の切手道樂である事を擧げたい。凡そ地球の上で發行せられた切手さいふ切手は、残りなく陛下の手に集まつてゐる。陛下が世界一の海軍と共に、世界一の郵便切手の蒐集を誇られたところで、誰一人異議を申し上げるものはなからうと思はれる程だ。

ジョージ陛下には今一つ道樂がある。それはタイプライターを叩く事で、斯の道にかけての陛下の實際は、倫敦で名うてのタイピストに比べても、決して負は取られない。だが、タイピストとしての陛下には、唯一人恐るべき敵手がある。夫は米國のキルソン大統領で、キルソン氏がタイピストとしての實際は、大統領としての手腕よりも、學者としての見識よりも際立つて優れてゐる。

キルソン氏は閑さへあるに、タイプライターに向つてこつこつ指を動かしてゐた。ある忙しい會社の重役は、甚く氏の實際に惚れ込んで、「タイピストにしてうちの會社に來て呉れたら、七百弗までは出して可い。」と言つたさうだ。してみると、氏が若い寡婦さんを、後妻に貰つたのは、經濟の立場から考へて

馬の上から

見ても、まんざら間違つた事ではなかつた。

男爵石黒忠忠氏の話による、自分を偉くしたのは半分以上川路左衛門尉聖謨の方ださうだ。石黒氏が偉いかさうかは知らないが、川路左衛門尉といへば、仙石騷動を裁いた名代の傑物だつた。石黒氏の父親は、子供を偉くするためには、何か素敵な物を見せなければならぬ。それには神様のお顔でも拜ませたら一番よかつたのだが、神様へお引合せを頼むには、紹介者がうるさかつた。そこで川路左衛門尉の前へ連れて行く事に定めた。

石黒氏の父親は、いつだつたか、態々相手の目に立つやうに、變り色の羽織を着て左衛門尉に會ひに往つた事があつた。その折左衛門尉は、自分が毎朝馬で馬場先を運動する事を話したので、石黒氏は父親に牽かれて、朝風から馬場先に出掛けて往つた。

左衛門尉は馬に乗つて遣つて来た。石黒氏は阿父さんに催促せられて、慌てて頭を下けて来た。左衛門尉は自分の前に茸のやうに踞つてゐるこの二人に目をつけた。

「や、お前いつぞや遣つて来た石黒ぢやの。」

左衛門尉は馬の上から聲をかけた、馬は立停つて叱りつけるやうな目付で二人を見下した。

「はい、石黒で御座います、御健勝の御容子を拜しまして何よりも……」

石黒氏の父親は、恚う言つて茸のやうな悴の頭をまた押へつけた。

「其處に居るのは、お前の悴かい。」

左衛門尉が然ういふと、馬もその積りで高慢臭い顔をして茸のやうな悴の頭を見た。

「はい、手前の悴でございます、何卒お見知り置き下されまして……」

石黒氏は父親に催促せられて、今まで下け詰めだつた頭を擡げた。見るに馬の上で左衛門尉の

二つの眼が蠟燭のやうに光つてゐた。

「いゝ兒だの、勉強して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」

左衛門尉は恚う言ひ捨て、馬に一鞭あてた。馬は自分で偉い者の手本を見せるやうに、後脚で

砂を蹴つて飛んだ。

「勉強して偉い者になれ。忘れるんではないぞ。」——石黒氏の説による、此の一言を忘れない

であるから、今の身分になつたのださうだ。實際結構な言葉だが、慙ういふ言葉は、矢張馬の上から茸のやうな子供に聞かせた方が、一番利き目があるやうだ。

慙 巧 者

先日藤田家の茶會に、故人香雪軒の遺愛品として陳列せられてゐた漢田村文琳の茶入については面白い話がある。

それは以前某の賣立會で、實業家M氏の手に入りかゝつたのを、横つちよから飛び出した藤田傳三郎氏が、一目見るなり欲しくて欲しくて溜らず、

『達ての頼みだ、是非譲つて欲しい。』

と、きつい所望に、M氏も止むを得ず譲る事にしたものだ。

M氏の腹では、藤田がそんなに欲しがつた茶入だ。代りには屹度氣のきいた幅でも寄すのだから。もしか金だつたら、一つ思ひ切つて洒落れた茶會でも開いてやらうと、心待にしてゐるに、其處へ届いたのは藤田氏からの一封で、開けて見るにM氏自身が心積りの幾倍かの小切手が包ん

であつた。

これだけ有つたら、洒落た茶會の六七度は出来る筈だつたが、M氏は茶會の代りに一度にやつて笑つて、夫で済ましてしまつた。そしてこんな場合、笑つて済ます事の出来る自分は、何とてふ慙巧者だらうと、つくづく感心をした。

さういふ履歴附の文琳の茶入が陳列されるさいふので、あの日一日の茶會には、東京から名高い五人組の茶人が下つて來た。五人組さいふのは、澤山なお金と、少しばかりの趣味とを結合させる五人の實業家である。

五人は其の茶入の前に來るに、一齊に眼を光らせた。成程結構な茶入だ、滅多に獲られない名器だなと思ふに、五人の頭は言ひ合はせたやうにM氏の事が浮んで來た。

『Mは何處に居るだらう、惜い物を手離したもんだな。』

『確か大連に旅行してる筈だ、電報をやらうか。』

『よからう。皆で一緒に笑つてやれ。』

さいふので、其の場で直に電報が打たれた。

大連の旅節で、M氏は五人名前の電報を受取つた。

「タムラブリンミンミタ バカヤロウダナ」

幾度読み返してみても同じ事なので、M氏はお婆さんのやうな顔を歪めてにやり笑つた。そしてこんな場合笑つて済ます事の出来る自分は、何いふ懶巧者だらうと熱々また感心をした。

### 三人畫家

先年YとBとTといふ日本畫家が、三人連立つて支那觀光に出掛ける途すがら、神戸へ立寄り、土地の富豪達が寄つて三人を招待した。

一體富豪が他を招待するのは、何か見せつけ度いさか、何か強請り度いさか、いつに限る事でもしかお客が一向物に感心しなかつたり、何一つ持合せの無い男だつたら、富豪といふものは、二度ももうそんな人を招待しようとはしないものだ。

神戸の富豪も、ちやんさ然ういふ型に嵌つてゐたから、宴會半ばになるに、そろ／＼畫絹を引張り出して、三人の畫家の前に擴げ出した。

「何か一寸したもので結構です、後の記念になる事ですから。」

怒ういつて、罐詰のなかへ石を入れる事も忘れない頭を丁寧に下げた。

夫を見たYは、急に喰べ酔つたやうな顔をし出した。蹣跚と立ち上つて「何か一つ遣つ付けませうかな。」

ミ、だらしなく畫絹の前に坐るミ、變な手附で馬鈴薯のやうなものをさつミ塗くつた。そしてミろんこの眼で凝み見てゐるが「此奴あ、可かん。」と言つて、畫絹をさつミ放り出した。

で、今度はまた新しい畫絹の上に、蝌蚪のやうなものを描きかけたが、一駄目だ、駄目だと呟いてまた其邊へおつ投り出した。

するミ最前から夫を見て居た富豪達は、いつの間にか各自にそつミ畫絹を抱へ込んで遁け出した。そして言ひ合はせたやうにBの前に集つて來た。

「Bさんはいつ見てもお若いすな。——さうぞお尋で一寸……」

Bは山のやうな畫絹の前に、汗みづくになつて、瀧を描き、山を描き、鶴を描き、龜を描き、洋妾のやうな觀音様を描き、神戸市長のやうな馬を描きしてゐるうちに、到頭眩がして、自分に

も判らぬやうな變な物と描き出した。

『巧いぞ……』

だしぬけに後で大きな聲で喚く者があるので、皆が吃驚して振りかへるに、兩手を懷中にYが欠伸をしい／＼衝立つてゐた。

なに、Tだけが居ないつて。——そんな筈はない。敏捷い惻巧者のTは、書箱が取出されたのを見るに、いつの間にか物置に滑り込んで、その儘そこで居睡をしてゐた。

### 新聞記者となる法

むかしベンヂヤミン・フランクリンが新聞事業を起さうとした時、それを聞いた友達は、強て止めだてをした。

『それは君、止した方がよからうぜ。屹度失敗するに極つてゐるからね。何故さいつて、讀者の地盤はもうすっかり開拓されちまつて、君の新聞が入る餘地が残つてゐないぢやないか。』

『成程、それも然うだがね、まあ思ひ立つた事だから行つてみるさ。』

フランクリンも幾らか無理に思ひながら、新聞を出すには出した。ミこころで、其の頃新聞といふものが幾つあつたかといふに、廣い亞米利加を通じて、たつた二種あつただけだつた。

今の京都大學教授K氏が、初めて新聞記者生活に入らうとした時、その先輩にあたる大内青龍氏は何か言つて聞かさなければならぬ羽目になつた。すべて先輩といふものは、後進が世間へ乗り出さうとする時には、得て何か言ひ聞かせたがるもので、そんな時自分にも實行出來兼ねる事を、尤もらしく言ひ聞かせる者ほが、先輩らしい先輩といふ事になつてゐる。もしか、怡好な言葉が思ひ出せなかつたら、そんな折には論語でも開けて見るが可い。論語は他に言つて聞かせるのに、都合の好い事がたんに載つてゐる本である。

大内氏は論語にお經ミがごつちやに入つてゐる頭を撫でた。

『すべて新聞記者なる者に、三つの心得ておかねばならぬ事がある。第一は借金をせぬ事。第二は喧嘩をせぬ事。第三は最後まで専門を出さぬ事。この三つが巧く守れたら、屹度成行疑ひなしぢや。』

K氏はこの三箇條を守り袋り入れた積りで、記者生活に入つて往つた。そして幾年か経つて氣



が注いでみるに、自分はいつの間にか記者生活を止めて、學者として大學教授になつてゐた。  
 『喧嘩は減多にしなかつたが、最後まで出してはならぬ筈の専門で飯を食ふやうにはなるし、加之に今だに借金はたんこ残つてゐるし……』  
 K氏は如何にも先輩にすまないか何ぞのやうに、慫う言つて咬いてゐるが、それでも大學の卒業生か何かで、新しく記者生活に入らうといふものがあるに『第一は借金をせぬ事。第二は喧嘩をせぬ事。第三は最後まで専門を出さぬ事。この三つが巧く守れたら、屹度成行疑ひなしぢや。』  
 今だに言ひ言ひしてゐる。

### 演説の用意

長い文章なら、どんな下手でも書く事が出来る。文章を短かく切り詰める事が出来るやうになつたら、其の人は一ぱしの書き手である。これは演説にもまたよく當て嵌る。

ウイルソン大統領といへば、米國でも聞えた雄辯家であるが、先日、仲の善いある友達が大統領に對つて、

『貴君は名代の演説上手でいらつしやるが、一つの演説を用意なさるに、その位の時間が要りますね。』

と訊いたものだ。何事によらず、素人といふものは、出来上る時間を訊きたがるもので、もしか畫家に對つて、何よりも先に

『あなた、この畫をお仕上けになるのに、幾日程お掛りでしたね。』

と訊く人があつたなら、其の人がそんな美人であらうに、先づ素人だに見て差支ない。ウイルソンの友達も、いづれは何を見ても鼻を鳴らして感心する輩だつたに相違ない。

ウイルソンは答へた。

『その位の時間といつて、それは演説の長さによる事ですからね。』

『いや御尤もの事で。』と質問者はそれだけで、何も角も飲み込めたらしい惘巧さうな顔をした。『してみますよ、議會での大演説などは、お支度になか／＼お時間が取れる事でせうな。』

『いや、さういふ意味ぢやない。』と雄辯家の大統領は上品に口を歪めて笑つた。『一番手間を取るの、所謂十分間演説といふ奴で、あれを用意するには、正直なところ二週間はかゝりますよ。』

「ほう、そんなもので。質問者は何だか腑に落ちなさうな返事をした。大統領は言葉を次いだ。それから、三十分位の演説だつたら、先づ用意に一週間いふ所です。もしか喋舌れるだけ喋舌つてもいゝいふのだつたら、夫には準備なぞ少しも要りませぬ。午直に言つて、直にでも喋舌れます。」  
素人よ、もしか感心する必要があつたら、演説でも、文章でも、成るべく短いのを選んだ方が無難だ。早い話が、女房の諷刺にしても、手短な奴にはちよいく飛び上る程痛いのがある。

肥 大 婦

亞米利加のある田舎に、居酒屋があつた。その女將は娘のうちから出嫌ひの上に、店の仕事  
が忙しづくめなので、十年許りいふもの、減多に戸口から外へ出なかつた。  
さうかうする間、女將は多くの居酒屋の亭主にあるやうに、むく／＼肥り出した。脂ぎつた顔  
が河馬のやうにだらしなくなりかけるに、客足は現金なもので、毎日のやうに寂れ出した。  
つい手許が不如意になり勝ちなので、女將は租税を納めるのを怠つた。一體租税さか、女房か

ら頼まれた手紙かいふものは、よく忘れ勝なもので、そんな物を忘れたり、怠つたりした所で  
一向掛構ひの無さうなものだが、暫くするに、土地の收税吏は怖い顔をして催促に出掛て来た。  
收税吏は瘦せた男だつた。瘦せてゐるだけに、女將の脂ぎつた顔を見るに、つい胸が悪くなつ  
て、悪口の二つ三つを投付けた。すると、女將はいきなり大きな掌面でもつて收税吏の横つ腹を  
押へて、ぐつと締めつけた。羸弱な役人の腹は薄荷酒の空壇のやうな恰好になつた。  
收税吏は女將の手許を潜りぬけて、空壇のやうに表へ轉がり出したと思ふに、直ぐ巡查を連れ  
て戻つて来た。暴行犯として女將を拘引しようといふのだ。  
巡查は女將の手首を掴へて、表へ引張り出さうとするが、肥つた女の體軀が入口に一杯にな  
つて、何うにも仕方が無い。強て拘引しようとするれば、入口を毀さなければならぬ。巡查にそん  
な力は與へられてゐないので、二人は始末に困つて、ぶつ／＼言ひながら引揚げたさうだ。

皮 肉 な 子 供

ルウズヴェルトの以前に米國にマツキンレイといふ大統領があつたのは、まだ記憶してゐる人

が多からう。この人は政治の外に一つの道楽を持つてゐた。道楽といふのは、閑がある、内閣の大臣とか、自分の友達とかを連れ立って華盛頓の市街を散歩した事だ。

散歩といふものは、病後上りや、孱弱な人に良いはかりでなく、さりわけ一國の大統領や大臣には一等効力があるものだ。一體政治家なにいふ輩は、自分が政治を執つてゐるうちが、この世の黄金時代で、狗までが自分を見る道道をよけて、お辭儀をするまでも思つてゐるらしいが、實際市街を散歩してみると、狗ばかりか、人間までが自分を見る、吠えつかうこしてゐるのを知ることが出来る。

マツキンレイはある日の午過ぎ、例のやうに友達と散歩に出掛けた。恰ど秋の半頃で、空は女のやうな碧い眼をして笑つてゐた。市街を通る人は皆上機嫌で、自分の事を思ふのに忙がしい風であつた。マツキンレイはこんな結構な日は、ワシントンの政治中にも滅多になかつたらうと思つた。

ふみ見る、日射のいゝ道の片側に、子供が五六人がや／＼遊んでゐた。そのなかに七歳ばかりの男の兒があつた。一人仲間を離れて、並木の蔭で小さな車に跨がつてゐた。大統領はそれを

見る、一寸悪戯がしてみたくなつた。

悪戯といふものは、人間のする事業のなかでは最も高尚なもの一つで、天才でなければ出来ない藝當である。マツキンレイは背後から子供の被てる帽子の鍔をぐつこ押へた。そして肩越しに大きな顔をここにこさせて覗き込んだ。大統領のつもりでは、慙うすれば、子供が屹度笑顔をかへして哭れるだらうと思つてゐたのだ。

「ところが、子供は皮肉な小童だに見えて、にこりこもしなかつた。そして落ちついた聲で、『叔父ちゃん、もう夫でする事ないの。』」

と言つた、お蔭でマツキンレイは冷水を浴びせかけられたやうに凍むでしまった。あの大きな團體の男が……

飛青磁

富豪A家の第二回入札に、二千三百八十九圓といふ値で春海に引取られた飛青磁の香爐がある。植段からいふ、大したものではないが、ある意味で好者仲間の好奇心を牽るゐたのは、この

香爐であつた。

この飛青磁は、もも大阪の平瀬家に傳はつて、同家名物の一つとして聞えてゐたものだ。この香爐が名物になつたのには、二つの譚があつた。其の一つはこれに木瓜の青貝螺鈿の卓が添はつてゐた事で、今一つはこれが贗物であるといふ事であつた。

平瀬家の人札に先代Aの主人は、此香爐卓を七千圓で購取つた、出入の骨董屋の値ぶみで卓が千圓、香爐が六千圓といふ積りであつた。

A家の主人がこの香爐を引取つたといふ事は、その頃の好者仲間で大分噂の種になつた。

「Aめ、たうし那の贗物を抱き込むだて。お互に一ばしの鑑定家になるには、みんな高い税を拂つたものさ。」

恚う言つて、皆は鑑定家らしい顔を見合はせて笑つたものだ。だが、考へて見るに、笑つて濟ますには餘り惜かつた。

「何でも一つ恥をかゝせてやらなくつちや、物持なんて輩は、耻でもかゝないに賢くなりやうが無いんだから。」

こゝ、皆はA家の主人に耻をかゝせる事に定めた。實際人間は人前で耻をかくことが、女に見捨てられるかとするに、一度に賢くなるもので、この段になるに、書物などはほんの閑潰しに過ぎない。皆は銀の金槌を拵へて、A家に贈つた。茶會でも開いて、皆の居合はす前で、例の香爐を叩き割れといふ謎なのだ。A家の主人は金槌だけは黙つて懷中にしまひ込むだが、一向茶會を開かうまはしなかつた。

で、今度の賣立で、木瓜の卓は六千圓といふ値にせり上げられたが、無事に生残つた飛青磁は大分見倒されて、二千三百八十九圓といふ事になつた。

だが、氣に懸るのは銀の金槌で、今度の賣立にも、那の金槌だけは出て居ないところを見るに、何うかしたのではあるまいか心配してゐる向もある。いや、心配するものはない。銀の金槌は今だにA家に残つて、そこらの釘の頭を叩いてゐる。釘といふものは、出来星の紳士と同じやうに、根柢が弛むに、直ぐ頭を持ちあけたがるものなので、時々金槌で叩いておく必要がある。

## 山の娘

貫名海屋の系統を傳へた谷口霧山が、まだ京都の下長者町に居た頃、南畫好きのある男が、態々大阪から訪ねて往つて弟子入りをした。

霧山は娘と二人で其處に住んでゐたが、その日は娘に留守番でも言ひつかつたを見て、皺くちやな口で、

『今日は誰も居ぬでの……』

と斷つて、薄茶一腹立てようと思ひなかつた。その代り薄茶よりも水つほい南畫の講釋をくまなく言つて聞かせた。

南畫を習はない先に、南畫は逆も習へないものだと思つた其の男は、折を見て歸らうとするに霧山は押へるやうな手つきをして引留めた。

『一寸待ちな。今娘が歸つて來たさかい、お引合せする。』

その男は畫も好きだつたが、それ以上に女が好きであつた。畫にはまだ解らない點もたんこあ

つたが、女の事だけは何も角も大抵知り抜いた積りである。それだけに娘に引合せを聞いては歸る譯にも往かなかつた。で、居すまひを直したり、一寸襟に手をやつたりした。

間もなく隔ての袂が開いてお茶が運び出された。

『これが俺の娘や、不束者での……』

さういふ霧山の言葉に、初めて氣が附いたやうに、其の男は丁寧に辭儀をした。そして顔を上げて相手を見た時吃驚した。

娘さんは小皺の寄つたお婆さんなのだ。

よくよく考へてみるに、不思議でもない。その頃霧山はもう七十の上を越してゐたらしかつたから、五十近い娘があつたところで、別段腹を立てる程の事でも無かつた。

その男はお茶も碌に飲まないで、そこ／＼に挨拶して歸つた。そして二度霧山の門を潜らうと思ひなかつた。

明恵と解脫

むかし笠置の解脫上人が、梅尾の明恵上人を訪ねた事があつた。その折明恵は質素な絹衣の下に、婦人の着さうな、緋の勝つた派手な下着を被てゐるので、解脫は夫が氣になつて溜らなかつた。出家の身分で、さりわけ上人とも呼ばれる境涯でありながら、こんな下着を被てゐることは、實際何うかしてゐるなと思つた。で、話の途切れに

「つかない事を伺ふやうぢやが、ついぞ見馴れない立派な下着を被てゐられますな。」

「幾らか皮肉の積で言つてみた。するこ、明恵は言はれて初めて氣が注いたやうに、

『是でござるかな。』一寸自分の襟を抜いて見せた。『これは豫て私に歸依してゐる或る町家の一人娘が亡くなつたので、其親達から何かの代に言つて寄進して参つたから、娘の菩提のためと思つて、一寸身につけてゐるやうに仕儀で——えらい所へお目が留りましたな。』言つて肅ましくやかに一寸笑つてみせた。

解脫上人は夫を聞いて、

『要らぬ所へ目がついたな。ほんの一寸の間でも、そんな所へ心を遣つたと思へば、明恵の思はくも恥しい。』

こ顔から火が出るやうな思ひをしたさうだ。

静かな死

茶人橘廣樹の死際こそ、此の上もなく静かなものだつた、その日は大阪にゐる友達から、名高いお城の黄金水を送つて来たから、夫でお茶を煮るのだこいつて、仲よしの田能村竹田などを招いて、氣輕さうに立働いてゐた。

火を吹きおこしたり、水瓶を洗つたりしてゐるうち、廣樹は急に氣分が悪くなつたこいつて横になつた。竹田は今更茶でもないの、枕頭に坐つて看病してゐるこ、曠方に廣樹は重さうな頭をもち上げて竹田を見た。

『いろく有難う、だが、今度は逆も助かるまい。もう茶を立てる間も無さうだから、那の黄金水を飲んでお別れがしたいものだ。』

竹田は水瓶を引張り寄せて、一口飲んで廣樹にさした。病人は鶴が水を飲むやうな口つきをして、美味さうに一口に飲みほした。そして今一度こいつで竹田にさした。竹田はまた飲んだ。廣樹は枕に顔をもちたせて、「今歌が出来たから、一つ書留てくれ給へ」といふので、竹田は筆を執つた、

ちよろづこそ

むすぶべき黄金水

汲みかはすれば

水泡こそ消ゆ

廣樹は懶さうに頭を擡けて、その拙い歌を見てゐたが、獨語のやうに

「おや、水の字がさし合ひになつてゐる。死ぬ迄の氣紛れに一つ考へ直してみよう。」

「さうだ、水泡消えゆく」でよかつたんだ。」  
と言つたかと思ふと、その儘息が絶えしまつたさうだ。

静かな死際だ。唯一つ欲をいふと、歌だけが餘計だつた。日本人は地味で、生一本で、別に言分はないが、唯一つ辭世を味みたがるのだけは贅澤すぎる。死際にはお喋舌は要らぬ事だ。狼のやうに黙つて死にたい。

保 險 屋

今の世に癡兵と生命保険の勧誘員は蒼蠅の如きは、たんこ有るまい。ある時其の生命保険の勧誘員が、亡くなつた上田敏博士を訪ねた事があつた。

夏の事だつた。勧誘員は扇をばち／＼鳴らしながら、學者の頭は硝子製のインキ壺と一緒に動かす、毀れ易い。それを禦ぐには何よりも生命保険に入つて置くに限る、何故かいつて生命保険は毀れたインキ壺の代りに、お錢を出して呉れる。お錢では新しいインキ壺を買ふ事も出来れば、麴麴菓子を買ふ事も出来る。さうした風な意味の事を喋舌つた。

博士は其の間煙草をふかし／＼黙つて相手の顔を見つめてゐたが、一頻りお喋舌が濟むと、靜かな調子で

「それぢや生命保険いふものは、恰で女郎のやうなもんですね。」  
 奇妙な事を訊いた。

「え、女郎のやうださ仰有るんですか。」勸誘員はすつかり度膽を抜かれた容子で目を白黒させた。「何故でございますね。」

「でも君、肉體で稼ぐのぢやないか。」博士は冷やかに笑つた。「僕はそんな真似は厭だね。」

「へー……肉體で稼ぐには恐れ入りましたね。」こいつて勸誘員は戯けたやうに、一寸お辭儀をしたが、逆も駄目ださあきらめて、素直に起つて歸つた。

またある生命保険の勸誘員が、辯護士H氏を訪ねて往つた事があつた。其の男は例の調子で、生命保険にさへ入つて置けば、老人になつても氣樂に口が送れるし、死ぬる時にも安心して息が引き取れるこいつたやうな、巧い事づくめを言つたものだ。

するさ皮肉屋のH氏は感心したやうに頭を掉つた。

「ふむ、生命保険つて、そんな結構なものかね。」

「全く結構づくめなもので御座いますよ。就いては何卒一つ……」こいつて、勸誘員は保険率の

刷物を取り出して、そつこ疊の上に置いた。

「そんな結構な者だつたら、君一人入つて内證にして置けば可いぢやないか、H氏は苦味丁幾のやうな言葉を、相手の顔一杯に投げつけた。「人もあらうに、見ず知らすの僕にまで知らせるなんて、君も餘程親切な男に見えるね。」

親切な勸誘員は、そこへ座を起つたが。それ以來二度さもうH氏に勧めようとしなくなつた。



大正十三年十月十三日印刷  
大正十三年十月十八日發行

茶 話 下 卷

不 許 複 製  
定 價 金 二 圓

著 者 薄 田 淳 介

印 發 行 人 荒 木 利 一 郎  
大阪府豊能郡豊能町字平尾四九九

印 刷 所 株式會社 大阪毎日新聞社  
大阪北區堂島東町二丁目三六

發 行 所 大阪毎日新聞社  
大阪市北區堂島  
振替大阪四五〇番

同 東京毎日新聞社  
東京市丸ノ内  
振替東京二八〇〇番

▲本社發行圖書目錄即申込次第進呈▼

大阪毎日新聞社發行

各地方新聞店販賣  
本品は節のれ切品

### 好評を博せる隨筆

薄田泣菫氏著 **茶話** 全三冊 上下各冊五百余頁・美裝  
定價上下各冊二圓・送料十二錢

茶話は隨筆文學の最も精妙で且最も興味の豊かなものであります。全巻の何れの頁を開いても、そこには限りなく面白い話話と人生の知識さが發見されます。眞に心より笑ふものは、神の心境を経験するものです。何人もこれを讀んで心の底より湧き上る笑ひに誘ひ込まれぬ者はありませんまい。明かな笑を味はんとする人達には非本書を御一讀下さい。

石川欣一氏著 **パイプをくはへて** 四六版・布裝・二百卅頁  
定價一圓三十錢・送料十錢

石川欣一氏著 **旅から旅へ** 四六版・白洋布裝・二百卅頁  
定價一圓五十錢・送料十錢  
何だか自分一人で失敗した詩人、失敗したヂャーナリストを一時に背負込んだやうな氣がする著者は言つてゐます。ヂャーナリストでも詩人でもなく、またその何れでもある著者の輕妙な文章、厭味のない洒脱なその筆致には何人の追隨も許さぬ面白さがあります。一は隨筆であり、一は旅行記でもあり隨筆でもあります。

尾崎行雄氏著 **零堂漫筆** 四六版・洋布・美裝  
定價一圓・送料八錢

### 趣味深い「サンデー毎日叢書」第四編迄出來

我が「サンデー毎日叢書」は「趣味の實用化」と「實用の趣味化」を二大モットーとして生れたもので、第一編發賣以來湧くが如き好評を博してゐます。美しい名越國三郎氏の裝幀とまつて趣味深い叢書であります。

西川一章亭氏編 **生花の話** 四六版・アト刷挿畫十五葉  
定價一圓・送料八錢

上田尙氏編 **釣の話** 四六版・二頁  
定價一圓・送料八錢  
愉快な釣の話、釣に對する親切な指導書、夏から秋の讀ものとして最上の書。

鷹司公外三氏編 **小鳥の話** 四六版・アト刷挿畫數葉  
定價一圓二十錢・送料十錢

第 四 編 **碁の新研究** 四六版・二頁  
定價一圓三十錢・送料十錢  
田村嘉平氏述 圖例百六十種を挿入して實戰に役立つやう苦心された、虎の巻とも云ふべき良書。

第 五 編 **詰將棋新題** 近 日 發 賣  
木見金次郎氏述

第 六 編 **日本音樂の聽き方** 近 日 發 賣  
那智俊守氏述

大阪毎日新聞社發行

各地方新聞店販賣  
本品は節のれ切品

大阪毎日新聞社發行

各書店・新聞店に賣  
品切れの節は本社へ

短篇小説集

—— 新刊と重版もの

渡邊均著

蜘蛛

蜘蛛

四六版・三百四十餘頁  
定價壹圓八拾錢 送料十二錢

新進作家の最近  
作を集めたもの

宮島資夫著

憎しみの後に

四六版・三百六十頁  
定價貳圓 送料十二錢

身を抉るやうな  
深刻な新作品集

加能作次郎著

一人の女

四六版・三百八十餘頁  
定價壹圓七拾錢 送料十二錢

流行作家の流行  
を超越した短篇

田中貢太郎著

黒雨集

集

四六版・三百二十餘頁  
定價壹圓五拾錢 送料十錢

他の追隨をゆる  
さぬ面白い物語

前田河一郎著

麵

麩

四六版・三百三十餘頁  
定價壹圓六拾錢 送料十錢

プロ派の大家の  
腕の冴を見よ!

水守之助著

傷ける心

四六版・三百八十餘頁  
定價壹圓七拾錢 送料十二錢

力強い新人の翻  
氣に充ちた傑作

谷崎二精著

線路の上

四六版・三百八十餘頁  
定價壹圓七拾錢 送料十二錢

霧の夜道を歩く  
やうな作品集!

水上瀧太郎著

明窓集

四六版・絹裝幀・箱入  
定價貳圓 送料十二錢

三田派重鎮の代  
表的傑作を集む

終